

# 子どもたちにより良い教育を！ ～サブ・サハラアフリカ地域における学校運営改善～



JICA北陸では金沢大学と協力して2008年9月から10月にかけて、サブ・サハラアフリカ地域における学校運営改善研修を実施しました。参加したのは、アフリカ6カ国（エチオピア・ガーナ・ザンビア・スーダン・ナイジェリア・マラウイ）から11名です。

## 日本・石川での研修

研修員の皆さんは、学校運営に関わる校長先生や地方の教育行政の方たち。皆さんの地域では教育への理解不足などにより児童の就学率も低く、学校の運営に課題を抱えています。一方、日本の学校では地域と協力した学校運営が盛んに進められています。そこで、滞在中には石川県内の小学校や関係機関を訪れ、視察や意見交換を通して地域との連携のあり方を中心に学びました。「日本の学校では地域と協力したいろいろなアイデアがいっぱい。私たちもできることから取り入れていきたい。」と皆さん。その後、研修を基に帰国後の学校運営改善に向けた活動の構想を練っていました。



小学校の下校様子を見学

## そしてマラウイへ

日本での研修後、アフリカ・マラウイでの補充研修を行いました。マラウイの研修は、アフリカ現地での学校運営の仕組みを知ることで、日本での経験を深め、より現地の状況に合わせて活用できる様にするのが目的です。JICAマラウイ事務所や現地で教育行政を支援しているJICAプロジェクトの協力を得て、教育行政から実際の学校現場まで、幅広い訪問先で意見交換を行いました。



白熱する議論

## ○教育システムで激突！

地方分権化が進むマラウイの教育行政の仕組みを学び、実際にマラウイの担当官と意見交換を行いました。

教育における地方分権のシステムのあり方や、そのメリット・デメリット、自国の事例や日本で学んだことを共有しながら、熱く議論を交わす皆さん。お互いの情報を共有し、教育行政のあり方を考えることが出来ました。

## ○先輩研修員の活躍に感激！

昨年、研修で石川を訪れた研修員2名を訪問しました。1名は市教育長のシチンガさん、もう1名はカト小学校校長のムンダさんです。二人が所属するムズ市市長からも大歓迎を受けました。帰国後シチンガさんは市の教育計画を刷新。学校運営での保護者の協力を進めるなど、2010年までの教育改善の計画を立案し、取組んでいました。ムンダさんは日本の学校訪問で学んだ生徒による学校緑化や運動会を実現。その結果、児童の登校数が増えています。また、地域の人々への学校紹介を通じて、協力が得られる様になり、新しい校舎を建設することもできました。先輩研修員の活動を見て「Yes, we can（そうだ、自分たちにもできるんだ！）」と意欲を高める皆さん。その皆さんとの意見交換を通じて、改めて学校運営のあり方を考えた先輩たち。お互いとても良い刺激になった様です。



新校舎前に集まる教師手前は学校緑化の樹木

## ○そして、住民とともに・・・

学校が遠いため、地域の人々が自ら誘致して建設した学校を訪問しました。学校長やPTA、その他大勢の地域の人々との意見交換を通じて、地域が学校に協力している様子を確認しました。例えば、児童の就学促進を手伝うボランティア活動や、学校建設に使うレンガ造りなど、それぞれの得意分野を活かした活動が見られました。その様子に感動した研修員達。「地域の学校への高い関心に感動した」「教育の重要性を理解し、最善を尽くしているのが素晴らしい」「是非活動を継続して欲しい」と、口々に語る皆さん。するとおもむろに一人の研修員が立ち上がりました。「今日は人生最良の日だ！」そういった彼は、なんと300ドル\*を地域のボランティアグループに寄付しました。「地域との連携による学校運営」といっても、なかなか地域の力を確信できなかった様ですが、日本の事例とともに、ここマラウイで地域の人々の活動を見て、地域の人々の力を確信したそうです。



地域の活動について語る住民



研修員からのサプライズ

\*300ドルは日本円で3万円。アフリカ地域では、なんと1人あたり平均年収の約3割に相当します。

# 実践！国際理解教育 ～海外研修から見た日本の子どもたちと考えたいこと～



JICA北陸では、毎年教師の方を対象に海外研修を実施しています。今年度は7名の先生方が夏にタンザニアを訪問し、現在、それぞれが各学校で国際理解授業を実践されています。その様子をちょっとのぞかせてもらいました。

## 「タンザニアの食べ物について考えよう」(小学1年生) 富山県高岡市立能町小学校 中村 佑希子 教諭

今日はタンザニアの食べ物について学びます。「タンザニアって日本と同じもの食べていると思う？」という先生の問いかけに、ほとんどの子どもたちは、「全然違うものを食べていると思う」と予想しました。では、実際はどうなのでしょう？先生が、いろいろな食べ物を紹介していきます。まずは、球状の緑色の物体。今までに見たことがないかな？なんだろう？とみんな首を傾げます。先生から「これくらい大きさだよ」[夏によく食べるよ]などのヒントをもらって、ようやく答えにたどり着きました。答えはスイカ。日本のように黒の縞模様はないですね。中身は日本と同じ赤色でした。その他、タンザニアの主食のウガリやバナナ、キャッサバ等、次々に紹介されるタンザニアフードに子どもたちは大興奮！



これは何でしょう？

ここで一呼吸置いて先生が問いかけます。「いろいろなタンザニアの食べ物を見てきたけど、日本と似ているもの、違うものはどれかな？」すると開口一番、子どもたちは、「スイカは一緒！」えっ？一緒？中村先生はちょっとびっくり！！「日本のスイカみたいに黒い縞模様はないけど…」と先生が聞くと、「そこは違うけど、中身は一緒でしょ。味も一緒」と子どもたち。見かけよりも中身を大切だと感じる子どもたちの心に、筆者は非常に感動させられました。この子どもたちが世界の人と出会ったら、私たち大人よりもずっと早く自然に同じ人間として仲良くなれるのでしょうか。そんな心の近さを保つために、先生がこのように常に世界と子どもたちをつなげていけることは大助だと改めて感じさせられました。

タンザニアの食べ物のことや、食べ物は世界中の人々にとって大切なものだと知った子どもたち。でも、先生から、世界には食べたくても十分に食べられない人々もたくさんいることを聞きました。私たちは食べ物のごとく考えているかな？大切にできているのかな？先生から大きな宿題が出されました。これからみんなでゆっくり考えてみてください。

## 「発展途上国の援助と開発～タンザニアを例として～」(中学3年生) 富山県下新川郡朝日町立朝日中学校 川端 満 教諭

前回の授業では、「あなたの大切なものは何ですか」「タンザニアがどんな国になって欲しいですか」などについて川端先生がタンザニアの高校生に答えてもらったアンケートをみんなで翻訳し、彼らの思いを知りました。

今日はその思いを交えてもう一度タンザニアの人が求めていることを発表しあい、それを叶えるためにはどうすればよいか、開発計画を立ててみることにしました。まずは一人で考え、次にグループでその意見を共有し、最後にクラス全体に広めます。最初は手が止まっていた生徒たちも、時間が経つにつれ、エンジンがかかってきました。道路整備をして物流を良くしたり、子どもたちが全員しっかり学校へ行けるように制度を整えたり、病気をなくするために保健医療を充実させたりと、生徒たちはタンザニアを良くするためにさまざまな角度から開発計画を立てました。ナイスな計画には、クラスから「お～！」というざわめきも起こりました。その後、先生は実際にJICAがタンザニアで行なっている支援事業のリストをみんなに配布しました。その支援の数の多さにみんなびっくり！。国際協力と言えば「井戸を掘る」、「学校を建てる」などのイメージが強いですが、実は他にもいろいろな形で支援が行われているんですね。「その中から自分が考えた計画を見つけてもらえ」と先生が言うと、みんなはうれしそうに蛍光ペンでチェックしていました。今日はいろいろな支援のあり方について考えた生徒たち。それがいつかみんなの手で実行される日を楽しみにしています。



真剣に開発計画を考えます



## ● 海外ボランティア from 北陸 体と心で伝える木工技術



竹中 成行さん(富山県出身/マラウイ/木工)

私はマラウイ湖のすぐそばにあるサリマ技術訓練校で、木工科の一年生約20名に対する木工の実習訓練を行っています。大工道具の基本的な使い方から始まり、様々な家具や建具を制作しています。訓練校では政府指定のカリキュラムに沿って授業を行うので、一学年で制作する課題が決まっています。一年生は、ピクチャーフレーム、ドア、窓、ベッド、机、椅子、棺桶を製作するのですが、棺桶制作がカリキュラムの中に含まれているのにはちょっとびっくりしました。また、マラウイではヨーロッパスタイルの道具を使っているので、鋸(のこぎり)や鉋(かんな)は引くのではなく押し使うのが日本との大きな違いです。



木工科の生徒たちと一緒に



椅子制作中の生徒たち

木工技術は頭で理解するだけでなく、練習して体で覚えなければ身につかないので、私の授業では講義の時間は少なく、課題について一通り説明した後は、安全面に注意を払いながら生徒達の作業を見守り巡回指導をするというのが自分の役目になっています。授業は毎日3時間ですが、いつもあま～という間に時間が過ぎてしまいます。

また、私は日本にいた頃にボーイスカウトのリーダーを務めていたこともあり、ここマラウイでも放課後や週末を利用してスカウト活動に携わっています。昨年度のJICA「世界の笑顔のために」プログラムに応募して、日本から制服とスカウト関連書籍を送っていただきました。皆さんのご協力に感謝致します。スカウティングが世界規模の活動であることを実感し、世界の仲間と共に活動できることを本当に嬉しく思っています。